源氏物語評釋

夢浮橋

三

第三帖

空蟬　評釋

奮迅　并一　此巻ハ源氏君十六歳の夏九月中ばより以歌為巻名　うつせみの身をかへて
てゝる木のもゝとゆゝしなほ人げ〜しれあらぬ〜にたれ　并の式ハ先按を以て本とし
抑侯侯松抑侯のごとく〜　但此抑侯ハ并ハ二の字を
一ハ堅二ハ按三ハ按堅をかゝ〜ゝ堅とし此巻の歌ハ按堅ハ帰本れ本の
事を書つゞ本〜ゝ按堅ハ巻末の歌ハ并ハ堅の巻より歌ハ并ハ堅の巻より歌ハ并ハ堅の巻より

こそいとめ堅の弁といつてハ沙ときこそぬいひざ角なりこれを一片〳〵ふつゞけたることを
をもろいくるまきバ淺の弁あどもいひもちつべし拙きこもちくいひ別きつるふ法ひく
今りこそきを改めまれて弁の美こといひてあるべしさるハ市もギ文のこふりづくるす
ものもあるべしバ人さて法師ふいそまてるごとく茎生をゴ屋をあどハ根の弁出さみを
つゝの美くふかくべきすをくまりて分ちりけるあまこバ海あり紫色又夕彩をなどた
帝本者のつゞたふてさゝふ弁びるる末和ゆ帝本ようタ彩まりでハ一
つゝふたゞきさる文あまこだもゞゝくこれをらんあるふれして弁といひくありなんら
末拙ふを根堅をかゆこりといるものひざまようゝゝバこまハ若ゆの弁ふハあまつゞて
反射の法ふて末をとくこりふて年月のつゞたハ初てタ彩ようりけこりさ末よハあゆの
末をもひゞりせていゆまバ弁の中ふ淺をこりのこりさをりのこりあどていゝえんされどこれもりこ舊
きふたをひつさゞれとふかくふ沙りの黄ろぬいひざ海あまバ一説ふ相壷を一とり帝本と二
とゝ帝法をとりきを末の弁一とり夕彩を弁二とりさて色ゆをことりるあどハさべく
用ゆゞてあゝびの末とハいへども一三の沙弁ハつゞきくゆ十四帖ゆして弁のさをを例ある拙
とりて生ゆの黄ふ屬る鄰とりるゆとハ尺てゞれバ人ハ帝法をこタ彩をゆとりてつゞて
こりる又ゆゞゝの末ゆ次初ゆ末ようり次くゆ拙根末ゆまでの九黄をナ人て如蕾の堅れ
弁とせゝまりるゆどハ法ふいまゆ帝ゆ一かこハ如蕾ゆんのゆをりく黄りる正ゆれども
すべてハ法氏黄ゆの栄ゆのさりを年をゆひくかりるを主とりるゆまバさゝふゆ蕾の
弁ゆハあゝぬゆのをゆ拙をこゆもいゆゞゝとふもかくゆもゆゆゝのゆどもハ大りこよ
ゝてはゝ拙くゞゝさてもりく年立の末ハ舊注ハ處女ゆまでハ一年づゆのゞゞひあること
如ふ拙ふいゞまりるゞゝくあまゞゞんりゆ次のまくゝふハ皆ゞふまて小拙の年立をのゝ用ゆくり

評 この考ハ帝本者の説をゆりくふきわて一説とゝりるあまゞゞよりゞゞかの説の脇ふ説
けくよむゞゝ法氏黄ゆ方述ふ中河の考ゆ人おそて一夜帝法黄よあひりくりしなゞり
を拙をちふおゞゝわすまゞでふくゞゞびおそゝりるふ帝法のかくまて色をくゞりしバ又
さくふ年ゞりりて考のゞへすくふ帝法とゆ彩陽莊とお對ひて碁を拙てありゝをかい
まみのりる正ゆゞ対ふめゞくふかさなるれくりかくて人をゆゞゆてゆのゞようりへくり
帝法の黄れひをりにすゞりゆくゆりひりけぬ彩陽莊法よあひりくりるなゞいりくめゞしく
めゞゞしさて拙ふくゆのりるふ老ゞゞちのようきてゞゆりる正ゆさ海をまりあふる
ゞゞくりまていとをりくめゞゞしさてすゞくゞ年ハ帝法のゆれ用ゆこのゆみゞきをりよ
年主ゆるゆふ彩陽莊をりりゆてありりふてゝりる人の法くふりりくゞゞ海
ふいひくゝをきを客りて主とりる帝法の用をこれいゞゞきをりよくきりゆるゆをこみ
いみゞくめゞゞしゞりるを女ハひゞゞりふかりゝりのゆゞゞふもりゞゞゞくゞゞ
ひゝてゆりゝちをもりるまりをもりゞゞりりふゆゞゞくゆゆりてつゆて人ふりりめ
あゆゞゝまりあゞ海ふりてゆゝゝ又ゆ年のりありりゆりりりりりをもりきゆ人拙の法れをも
おりひまりりゞゞりゝ人ちりゝぬゞ海ふりりてゆゝりりりりり

をさきうんこそを惜しうるあわれの事ゆゑ
の巧やかなるをいまめかしうまふ小君の
ろかのをとりぐるまあるくるつけく宇陪と彩霞秋との
けをとをとぢめまてる八巻の初代ゆゑ
るあくいとづふんるとべうしびあん

初〜まあるあまくよ

頂 帚木巻その段此詞よつげてら
けりいまさけいのもどうふとうと
きひての事なり

評 巻のならざ高いめづし帚木
巻ふふ君と言ふ森ひ〜るをい
ひをりうくこの巻れ初ふくも也
ゆ〜〜る巻れ外のこ〜ちして
いとをう〜あいごうふんをんべ〜ず
るれいうく

新 俗りのけんやま
さまいとをあてふをよかくのをを
次ふ俗のやうふものをひまつさ
ぞとあるをりておりへ女おるる
をぬべ〜とおびひうるるが〜
かくまれてもあるねを

釈 人ふ惜まれるるいをきく
あ巻をとりかさふあるれ未駅
ぬ出て俗ふあと末〜ぬとうがと
あるらふまづくうて

釈 いとをづうきあるひる存命し
ゲ〜ねやうふもやとのうを
てきどうの

釈 帚木巻ふいてづしく男色を
ゆのあ〜〜ら出ざまこれふてる
ゆ〜男色あ〜ばし〜てらづう

○うつをく

源氏君 寝

初れ泣ぬまに寝巻はかくく人ふるくまれ 如此 憎
てもなるをもぬををよいあんちであてうしと 今夜 始 憂
をををれもひまるりぬまばちづうくぶづらふ 知 愧 存 命
まづくてを出ひなるぬれなどのるまへば涙を 成 小君
さへこぼして寝ぬるちぬとらうるとちがす。 卧 カハユラシ
てきどりのほそくちひさたれどかみのいと 一デ 細 小 アバイ 髪
なづらざりう宿ちひのさはは似るひるも。 テザハリ 長 ケシキ ムスセ三ホ君カ
出ひ別るまやらられるりぬあるぬちふかづらひ ムリヤリニ カ、リアヒ
ぬ寝ごろよるんもの人ろるるべくまを知やらに 夕ツネ ザマソル 真実
めざ侍とおぼあるつぬまいのやうゆも 明 イツモノ
のるまひまるつをさび義ふくいでるべばるの子ハ 優 小君 帰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人こゝろよりひきいれて（源ヲ下）たちーゐてまつ
る。わらはなまじ（童）だのぬし（バシニシ）おぢもことふ（殊）ふいまし
ほめそう（挺）をぢ公やとて。ひんがしつまどふ（東戸）
ゐてまうて。我はこゝのみのすみれまより（小君 南 角 間）かう（格）
子たゝきのもりていりぬぐちあふぎ（敲 仰山ニヒタテ、入 御 扇 頭露）
といふなりおぞうあつ（小君ヲ 如此 暑）ぬぎ（格子）
おろされ（下）ぬ。とゝ（問）へど。ひる（昼）よりみの（西）ぬうの
ゐ（空ノ方）ぬ。ごう（打）を（添ム）ふとふ（碁）さく
むひ（向合居）ぬ。うんをんだやとゐひく。やをらあ
やく（歩出）いで。すだれ（簾）のそば（挟間）よりおひぬこの（小君）入
つるゝ（格子）ひまぶち（間際）ひばひきゆるふよりく。

この入つるゝ（西）ばのきは（際）ふかてたる
ぶち（縁）に向合ーゐて（入）るをぶ（見）
ふとぶきてその（様）ぶをまぶさ（遮）ぬを
なりこれ源氏（中）のうまみの（柱）をえ
きて下のゐ（側）をあーり（近）ぬん
まゐけくもべ（入）
ゐーざ（西）ゐ（方）ぶ（畳）ゐ（眼）ぶ（遮）
ぶ（暑）ぶ（暑）ぶ（暑）ぶ（暑）ぶ（暑）
氏（中）ばのうまみ（柱）をゐ（側）ぶ（近）ぬ（入）
ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）
このきはのうてる屏風も
（濃）このきはのうてる屏風も
てなてる屏風も端の方さま
まてるゐられも小君ぶ入ーぬる
べーまてゐて又をぬ（綾）ぶてゐる九
帳も弱々まばゐ（草）をはへぶけく
その下のようぶ入ーるとゐ下の
小君ぶ（苗）ぬよ格子ぶ九帳をへて伏と
あるふ合せ（表）ふべ（着）
火ちらゐ（頭）ゐ
ぬのあるきをぬ（濃）ぶ（綾）ぶ（草）
うゐ（表）ぶ（着）ぶ（頭）
ゐやの中柱（中）よ（柱）屋のき
ゐこの（側）拾遺ぶいるれうゐ（近）ぬ
ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）ぶ（見）ぶ（入）

めりいはひとりハ泣んぐむきてのこる所なく
こゆ。ちろたうすもよ歩とくぐさひ。ふるあるの
白 羅 単 重 二 蓋
こうちきぶつのないぐろよきれてくれ
小 袿 孟袴の腰 メク シドケナウ 著 成 紅
なめのうひきゆへるきえでもむひあハ
際 結 胸 顕露
ひとりハ泣んぐむきてのこる所なく
東 向
身ガ ヘ ラク
ぶつとこうて。ぶ。ろるくの。
セイタカゲ ニルくトフトリ
ぶつぶくとこうて。ぶ。ろるくの。
額 愛 敬
ハッキリト メモト
ぶつぶくとこうて。ぶ。ろるくの。
リッパ
ちぶりぶ。ろくハいとやうふてなぐくハあくひど。
クチモト 髪 タッフリ
ちぶりぶ。ろくハいとやうふてなぐくハあくひど。
ちぶりぶ。ろくハいとやうふてなぐくハあくひど。
端 肩 アンバイ 清 惣 ユガミ
ちぶりぶ。ろくハいとやうふてなぐくハあくひど。
下 ウツクシゲ
ちぶりぶ。ろくハいとやうふてなぐくハあくひど。
ウツクシゲ

あるあるべく側めるハ横ふよりきる
うちちあり
あるくうあくんうへよきて
評 表のんるさーのとりぬふ拍よ
よりてよくもそ、ぬさぬを頭ざん
とてはうあるあくんといくるめでくし
あるなども云く 評 これより平懐の
用ふあるをいろ此恨かうちよ
よくねど用さあるさへとを及翼とうり
よくくはくよ云ー
ちつさ云く 細 表をあよはけハ
あべきをもよををに引くをを
用さはくぬ作あり
こうちをぐつ拍 釈 ぐつハめくとを
ふをーを形容辞へれもををあよ
あくとりていくあり
うべくをおやの 釈 られあるをよ
伊与みゆ赤むすあを世ふ又あく呂
うハさふどを沙るひるさ海ふ出るく
ふちぐれちづるけををへぐや
評 こまりうり上ハ容貌のめでを
ようをあげてくふをめさとじき
をおくめくり宇保ハ先ゆちの
ゆうををひて次ふ用さのあをを

あくハせり抑揚及対句の渋おど
ををあうとうふべー
あどあをよあるまど 釈 保氏ふ
のんよあるて苦ま地より泳ぐさる
あり文勢あぐハひいり
ごうちまをて 釈 ちより又保氏
男の人あるさまく形容詞あり
ちくの人ハ 細 宇惟く宇宙の要あり
をくハぢこをてあくめ
玉鬘 持ハ今俗ふ云せきのくを人の
の巻ねすあふをくをう 雛業 左伝宣
変棋 謂不能相害為持 ナリ
すくくの所く 釈 ちの壁のをくく
の地をうをあうさあくちびハさど
指のすあくと上ふをくをう
いよのゆどくも 猶 孟 六花糸ふ
古分とて出ぜり いよのゆ化ぜげさ
の数ハ左ハ九ッ 中ハ十ふまを
てふすこをといくり 河 図 体源抄
伊像湯 雑藝催馬楽 いよのゆれ
ゆげさハいくついさまくをくをゆん
ぜやかをへぜよあびや、そよや
あよや男どちくんや 細 釈をき
まふいあくを又今父の伊与へりくる
当ちを似今ちる付く 釈 形容詞の

親 ナルホド
うをこそおやの世よなくハ形のあくめ。とを
氣 モチ モチノ
くくを人絵ふをくちぞあくまづをなるけ成
オ フイト
そへだ高やとふとみゆる。かぶくをよハ行るまど。
竟 タメサスヘン ハヤサウ
ごうちちをてくぞちをくをくをう。んをげよを
イーウ テキハキトザワヅケハ 奥 空セミ 持
ちをくくとさうどけバ。ゆくれ人ハいと
オチツイテ 待
ちをくたのどをんてぞちるくやそをちぢを
勅
こをあくくめ。あのわへくれをうををてぶどい
形容詞 イヤモ 頭 隅
へどいでくのきびハおけふをを。すみの形く
指 屈 十 二十 三十 四十
などくいでくとおよびをかがあてぞうをちるみをよて
筆 フウ 湯 折 フアンナイニ 空を三貫
うるまどうるものずとをれ折とをてうぞをと
アル ヒ イハウ

碁の地をゞ〜ゐきまめのあるとつ
ゐ〜ぢ〜ゐの左八右八九ぢとゐ〜ぢ〜
のゐ〜ぢ〜ぢ〜ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
すゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
釈 彩端
萩の人ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
といふ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
いゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
王 彩端
萩のぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
く美ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
釈 王 あぎやゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
とゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
ぞすゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
釈 好色のゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
信実あ〜ぬ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
えたゞり すてゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
評 これやぐて下の人ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜
釈 源氏君の
ゐ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜ぢ〜

あゆまふかう行りあば
釈 彩雲花のおのゑすむ西の方へ
入りあひとりわさく
さもあびーつづき 釈 小君ぐ
しぐりゆあんとりあをきこうひて
さゆうゆもいあびうすぐきを惜
のけりあーん小君ぐりらあれど
あのーらぐ人のうーさあはべく
ちづまりーれどとひらあをあり
世界いさう紛らりーきをかくん
ざれば心ばぐーーよりくえんでし
このーあくーーはさーてんとて
釈 上文の小君がたーさのーあを
入ぬとひ沒まび入つーあくーしま
ぐさ〜移ぐーとくる格子のすゆく
今まーく小君が如く仆ふるを女
房のさーんーてゆ君ハさーとひ
てゆろーてゆまく格子のそ尾格子
をのひくめでくーーあ仆格子
をさ仆ととるさけるをゆくく
ちづまりぬあり 釈 孩話まり
ぬーありこより源氏君の詞し
小橋よ地の詞とせられさゆ
よーー日補遠ゆもゆり
いりーうと 釈 妹人の親こ

こよひりやゆーーてんとすゆ。いくこのさまうゆ
今夜 ヤウサメウ
からうこそうあべそれどのゆへだ。などてう。あか
ツラウ アチラヘ 少君ガ ドウシテ 弁尼ガ
くよゆかてゆうなゆ。まゆ行りなんとき
源氏 計
らゆ。さもなびうーつべれそうきふこてハあ
シタガヘサウナ 成セモ ヤウス
らんゆ。ゆーーはーれど。ゆのんどへ人はあーれ
コドモ キドリ ヤウス
みつぐくちびまゆるとゆばゆもありそう。
オチツイタル モノヲ
碁 ごうちてつるゆやりーん。うちてよめくくー
イテヨメクテ ザワツク
ちーて。くくあぐてけもひなどてたう。
ワカレル モノオト ス
細 小君ゆを女房ゆちの寝すゆ行く
ゆう君ハいづくにれてまれなーん。このみ
御
格子 ハさーてんとてなーれあり。ちづまり
鎖 鳴 源氏ガ 静
ぬあまゆ。ゆりて行ーび出でられとのまふこれ
入 計

いりーハ夫妻兄弟ゆ小男よう
女をび次ゆ女かりーび妹とつり
こーもそのさゆくゆ侍のりく
このびゆまでハさる詞のきゆ
さゆむ所ゆくまあざちたれば
釈 真実ゆすぐをたてゆさ
ゆも接ゆびあびうぬさも
かりーーハ木丁をて
釈 ゆはまゆすぐき格子ゆハ九帳を
ゆてをへてあれば九かゆ
さう 王 さやうぞうあり
ゆしゆ木ゆをへて侍ゆ世ゆーーゆ
このゆーゆびハつゆゆ
釈 かうーハすぐぶきーーまゆバゆ
ゆびハ妻ゆをたゆさてあげゆ世
てハゆーーゆをつけてゆへべー
ゆかへくゆぐりうねゆう
評 こゆて人ゆの寝ゆぐれゆ
ゆーうんてゆゆうゆる例の妻
ーゆ世ゆぐはあり
このゆさうーはふ
釈 小君ゆりゆ所ゆねんゆるゆ
ゆまふかてゆて入ゆる所のゆ
ゆきゆさうーぐちぶうて源氏
を入ゆとゆんとゆうーー

ゆといゆうとゆの侍ゆハゆゆ
小君 ネ 挑 真実
ゆれバゆいひあゆをんうゆなゆて。人ぐくあ
ゆうゆのいゆうーーとゆあゆふゆうゆれゆかい
姉 此方 在 イヒ 小君ガ ドウシテサウハ
ゆまみゆをゆゆゆのゆへぐゆぐゆうゆて侍ゆん。
キメ 格子 源氏ガ
かうーーゆは九帳ゆへゆく侍ゆ。ゆゆゆゆ。ゆゆ
タテノ モノヲ サウジヤ
侍ゆゆでゆゆ。ゆゆゆゆゆゆゆゆ。ゆゆ
見タリ 可 笑 ミタ 小君ニモ
せゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ニイ キノドクナ 夜更 ニチ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ドホサ 小君 妻 戸 敲
きゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
障 子 入 寝 小君ガ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ロ ワシ ネテラフウ 通

たゝみひろげて 釋 古への畳ハ今のゝごとく ㊟ 書ハ世俗ニ已
所收ニ入せこひこゝろ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あれバこの目もくまあく紗〜
きまとゝの者ゝを咲ふふうそうけるえ
昨日ふ木芽をひらけてるハさふ
もゝそびくハえの財あれ美あ
とゝゝゝうゝるいゝあでゝ〜
ひゝくゝゝけるる本丁の
丁本丁のゝゝびゝ二ゝあゝべきゝを
ゑあまゝびひゝくへとらけり 釈 伴侍云
うゝゝひのひゝくを一ゝをぬゝゝて本丁ふ
みけあひゝゝゝゝとゝゝ
うちみゝゝゝぎ 釈 まゝゝゝ月
を初ゝ手形客をゝゝゝ詞ゝゝく俗ふ
むゝゝゝくとゝあゝ近ゝ法住ゝゝあれ
ひゝゝ〜
ひゝくゝ泣ゝゝをきて 新 いとあつけ
まバ肌ふひゝくゝのゝきゝゝ小穂ハも
とゝゝう衣ゝみゝ上ふきゝてゝゝゝさ
ゝゝ、ゝゝひゝくゝのゝゝふて弁ゝゝすゝし
おきゝて出ゝゝゝ
すゝゝり出ふゝゝ 釈 ひゝゝゝたゝゝゝり
ぬけゝく逃出ゝゝゝすゝゝゝしハ立ゝゝ
しゝて居あゝゝゝゝひ出ゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝもに 釈 ふ様のねゝゝゝ
下段の間段床のトふ女房二人ゝ
ゝゝふゝゝるゝゝふ弁ハ皆あの底ふ

をきゝく。ゝゝゝ 著
ゝゝゝゝ

釈 世中とハ男女のあひだをいふ
新勅撰ハ男女のあひだをもぐ
あひぬるぐしひとうかされてこそ
うきめをかくるなみだかな
そもそもいかなるものぞ書おきしハ
或ハ世をもとく万水一雲の
人よあひさるやうにあるべきの中
とつくハいかなるたひごとく
世をつくむも 録 つむハつゝむ
とゝくんぞと 釈 ゝのりハつ
ゝむを四ゝれとつむハかたゝ云
うゝふろう
ゝどゝん人ハ 釈 ゝどゝんとハ
あてふ推量ふしてさぐり初んとす
ゝをゝんたづねられどハ中陸へのひん
ざゝとゝたづねられど
さゝとて世ゝ世をまぎらひあぬ
ようにかれぬゝゝるゝゝもてとあ
ゝゝ屋ゝゝゝかれてゝてさゝゝゝる
ゝゝゝれどゝゝかるれバゝゝゝぬ
あやふくふまぎれぐこう
釈 かゝもゝゝゝゝ人ハゝゝとあゞ
ゝゝばゝゝてもゝひ絶すゝゝをあ
ゝゝゝゝひ出ゝれゝゝゝゝゝ帰本業

まぐいとわゝゝゝゝゝ

どもえもんうるはちをさとく
かのぬぎすべくさうとをるうす衣
国一本ふかくあるぞうろをぬぎ
すべくさうるの八源氏まんはくろふ和
うつまうをきバとをるとうの何
あるべくれバうく 釈ぬぎすべし
ぬぎすべくうて接至さうく上かひ
くひくうをきてあふてしてて
んうべ
ふくやどうきぬ 釈をきてあるく
ゆをやをもあるく 釈さねふ
をふあげさせて小男ぶ入るつま
ゆあるべ老さるどちハ東の庶ま
祐ふる女房のうちあるべ
さうがうてとぶをへく
新宮ぶうしくく 釈老女のりと
さてうて外の方あるくうるく俗俗
ぶふい男ををうさるひどくく
いとふうて 釈小男ぶうよ老女の
さうるをあるあるて
あべ 国俗ふふや何すでる知
とふさるり
暁ちる月 万おふくをとみ
る初の宮賀面白
又おいするハさてとふるく

○九

うしろめたうちひて祐れバぷとはどうきぬ。
キヅカハシウ 寝
ゆをうちおあるこむいるぶどちれ
ソツト 胸 老 御 等
てあるてあれハそとはどうくくとふようづ
誰 ギヤウサンニ 問 コメン
ダウニテ
たうくくまうぞといふ松中ふうもあるぞあ
ワシギヤ 答 ぶどち河 此
ふ歩行 河 ルウデハナイ
あるうたちうき月ふるあくけういでふとく
湖 暁 隈
のうげみうるまぶどちるおうるハきてとやふ。
影 ぶどち河 ハ人 誰 問
うんぶのいおとなあうそうあるぬはるの
民 部 御 許 ケ シカラヌ
ぎうたうれといふ。ゆけたうれ人のつふと
長 立 セイノタカイ 常
らたうる我いあうるうぬいるうれをけう
矣 光 小書が

○うつきく

細 此女のうくなることうひてもく
民ぶのおりくと自河自答すく
花ゆるふハお浦のおりくありなの
うろうく 花ゆるハお高ぶとふぶ
いまうくぶうたおびのひあん
釈小男ぶ背ゆのうぶ今のびふ
民約のおりくとうふおて立並
うべくとえ老女のうちうたを
いとようううれうくふび
うの戸より 釈小男ぶあげる
戸ロより老ぶちもかてうる
うびくうれて
釈源氏ぶ
おうえさでハおりかくてたそもえ
うのあめ湖月小男女のうをを
めぶうたうとあるハかうぶう
波後のにふ 釈上ようる後の戸ロふ
とうたうをうをてハけをひそく
うんうやまあひあひつる
国或拾ふうてうう人のおりまれ
ゆをさうてゆくいうてうう
ユ次のケうもゆたつるくくる
ト言ぶてうたびもトハ下屋
いくくもうであるうり
釈ひうをもゆぎうて行ぶうる
今ひうんハ後小妻く語くんと

祐てあうたるとちひくぶうらぶいまふるちあう
びはひなんといふくぶられもうの戸よういでく
来 源氏 メイワクナレド イヒナガラ 回 出
くうびいまでぶんもうおうえさでぶうる後の
ロ 副 隠 立 老ゴダチく
ちたういてひくかれうちあうくまぶうのあると
ちうあるうて羽 今夜 上 オヤヘ
はうあうくはうあうくはうあうくは

いそぐとたさく 新 ちくハ後ぞ
しとゝふべたをいそゝときぞハいひ
あくぬあり
いよ〳〵おぢしろぬべし 釈 いよく
とゝつゝハ上ふるみのもをきあたとゝろ
あくゝおぐせどくいいうぞをとゝ
ゞ所きすもてゝゝちぐをふ事と
あゞぶ者へいいよ〳〵とハのゝあり
湖月抄後さ中悔のつまてあたふこう
ちゝうゝはゝくとゝのゝハゝぐゝ
評 このおぐごちふ生あひすゝ一段
ハ伝孔雀物ふ出てゝゝちのあく
人ゝぐへのゝれ侍ゝあくをき
ちゝん事を侍ゝゝち手ぐゝひふ
べしいとゝあぞゝ
ゆくゝ侍のちゝ山そ 釈 小男四車の
ちゝふ事て市供をゝあり
つまゝぐたをゝつ 釈 ちゝく恨
むの侍のさきゝくゝまゝぐたハ爪さた
をゝゝあて淳くゝあり
ゞもゝく 新 こハ多を智俊
よてゝゝふゝさ多とゝあ同ト
あゝつゝゝゝちきを
評 上ゝちゝ生衣をゝとゝてゝあを
ゝふ小桂とひてゝゝすぎあやゝて

うゝきゝ
ゝといよく おぢ〳〵ちゝぬべし 懲 こ君は
車のちゝふゝく 後集 ゝ侍院ふれちゝまぬ 小男三人夜
さ侍のゝまひて 雑 ゝをゝしちゝゝ事とあゝめゝまひ
てゝかのゝ人れんを 瓜 ゝたまちぐたをゝつゝゝみ
ゝふゝ 小男 ゝちゝうてあのをゝえゝゝぐゝいゝふゝう
ふゝゝゝ侍ふべゝめれバ 合ガ もうゝくゝひゝてぬが
空ノ
どゝよてふゝくゝ 竟 ゝもゝちゝれいゝへゝぐちハし
ヨソナガラ
ゝふちぐゝ 伊与分 いよのすけよおとゝゝる分ゝ義 管ヘン
なゝどんづゝゝれ 八マ ゝとおゝひくゝのゝふゝゝゝれ
こゝちたをゝ 小桂 サウハイフモノ 衣 ゝれちゝふひゝられ
てゝおゝとのゝめゝちゝゝ君成おゝすへよふゝせゝ。
御 寝 御前 令卧

よゝびようゝゝ
ゝみゝゝゝかゝゝひゝゝふ 源氏 五十子 ゝは
カタチニハ
ゝゝゝれど 源氏 ゝたゝゝれゆゝゝたゝ 縁 ゝゝゝひ
ツレナキ人ノ
ゝまゝれ ゝゝめゝゝたのゝまゝを 小男 いとゝゝ
シンシツニ
びゝ ゝとゝひゝゝ 源 ゝゝゝ おゝゝゝゝゝゝゝ 祢
ライ
ゝまゝゝゝ 硯 ゝゝゝゝゝゝゝゝ 召 ゝゝゝゝ
ゝゝゝふハゝゝ 畳 ゝゝゝゝ 紙 ゝゝゝゝ 手習
ノ
のゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝ
タガキシ
源氏君 うつせみの 蟬 ゝをゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝれなゝゝ ゝゝたかれ ゝゝゝゝゝゝゝゝ
中 ゝゝふゝゝれ 入 ゝゝれゝゝゝ 特有 源 ゝゝゝゝ 残ノハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆ[ゆ]ゆ[ゆ]ゆ[ゆ]の[の]ち[ち]ふ[ふ]お[お]く[く]や[や]の[の]こ[こ]ご[ご]れ[れ]て[て]ち[ち]の[の]び[び]
羽　今ノ　隱
よ[よ]め[め]る[る]神[神]な[な]れ

(釈)世の常本のあるを既にいへるこゝもそのさまとてそれのもうけあるらば源氏ふもとびひきるべきこゝもあくんをとゝうへされぬものそひ知〜れてものびがたしよう〜

ゆゝ悔のこゝろおくこゝのの

(釈)この巻今篇伊勢物語よりとゆ海さそれの物どもふいられるハひがこゝろ〜拾遺抄釈小振

ふいられるごとし〜全くいせ集ふもいかもあれこゝろ

初句ふうをみの名をうへてるとあるをうけくいこゝのこゝろ

ゆ悔のゆくこゝ句のぬりハ例のごとくこゝとゆきこゝ成ゆゝあてゆゆ

ぬまてこゝまでハ序ありまゝ

ちこゝ[ゆ]をゆひくくもれぬ源よひこゝに神をめゝまよゝ

(評)小まのこゝろうあくふつけくゆ悔くゆ彩偽歌

らんがごとくゆていうくめゝこゝ上ふまこゝを打ゝらるゆゝくかこゝちみこゝまうこゝこゝこゝ

おゝくこゝふ打ゝくゆこゝのけちめをうれ知〜れこゝふ片ゆこゝうもゆひのこゝるまこゝこゝこゝ

めゝ〜〜れこゝふこゝうあゝこゝうきてこゝふこゝをのて世こゝをこゝゆあこゝるいこゝめよ初〜れふうぬゆこゝふとゆこゝあ

ふゝこゝ出知〜ゝこゝそ度ゆくこゝゆこゝかくこゝのあふ詞ゝて待〜れゝんとゆゝこゝいひ〜ゝらびゝこゝのひ〜ゝうゝ人

よゝく〜味〜こゝひ考よべ〜